

●近頃ほしいもの二題

先日、テレビ番組で全国の空き家数760万戸（H20総数5760万戸の13%）と報じていた。住宅土地統計調査をみると、H20の東京都内の住宅戸数は680万戸でH15から60万戸増加。一方H20の空き家数は75万戸で、内訳は賃貸用49万、売却用5万、本当の空き家19万、その他別荘などとなっている。H15→H20の住宅増加戸数を上回る空き家が都内にも存在する。コンパクトな市街地形成や、住環境の改善などに活用してほしいものである。

国土強靱化にむけた公共事業投資が拡大するといわれる。日頃気になっていることだが、電車に乗車していると沿線に張り付いた住宅が結構多い。火災による不通や地震での倒壊を防ぐために、鉄道は全面が接道するための事業制度ができないものか。防災性はもとより、住環境の改善、乗客が宅地を表側から眺められるので都市景観の改善、沿線の緑化によるヒートアイランド対策、風の道など多くの効果が期待できそうだ。コンクリートに過度に傾斜しない公共事業を進めてほしいものである。

矢島 充郎（第一計画部）

●ハノイ街路風景に見る格差

ハノイの中心部である旧市街では、人々の暮らしが狭小な空間で非常に高密度に積層している。例えば、ある時間になると歩道がバイクで埋め尽くされ駐車スペースと化す。あるいは、プラスチックの小さな椅子とテーブルが並べられ路上レストランとなる。旧市街の路上では花やフルーツを売る行商のおばちゃん達が行き交い、その傍らでは青物市場が展開し、肉屋が鶏を裁く光景や、囲碁の様なゲームに興じる男性衆も観察できる。公共スペースにはみ出すこれらのプライベートな活動風景は外国人を惹きつけ、この地はハノイ随一の観光スポットとして昼夜を問わず賑わっている。空間を柔軟にシェアする事で生じる旧市街の生活景は活気に溢れ、とても魅力的である。

そんな旧市街の東側にはホン河が流れており、フィッシャーズビレッジが形成されている。簡易なボート上に木材や紙等でバラック小屋を建て、3畳程の広さに一家族がひしめき合いながら生活している。劣悪な衛生・居住環境、壊れかけたサンダルに当て布をした衣服。正式な職を持たない彼らは、ゴミ拾い等で一日1\$程の収入を稼ぎながら生計を立てている。

一方で急速に開発が進んでいる新市街では、まるで新宿のオフィスビルや、豊洲のマンションの様な高層ビル群が並んでいる。マンションの入り口には着飾った受付嬢。全自動オートロックの扉、床から天井までガラス張りの広々としたリビング、コンビニから映画館まで併設した超高級マンション。便利で快適なこの様なマンションに住めるのは、一部の富裕層に限られている。マンションの足元に広がる巨大なオープンスペースは、正午過ぎの熱気が漂う時間ゆえだろうか、人影がなくシンと静まっていた。

このように、急速に進む開発と広がる格差の中で安全・安心の保証や、公平性や快適さの獲得を目指した都市開発が求められる。それと同時に、その都市らしい風景を残していくような都市開発の在り方についても、しっかりと考えてゆきたい。

金子 奈津（海外室）

発行責任者：代表取締役 庄山 高司
事務局：株式会社アルメック 業務部
東京都目黒区青葉台 1-19-14
電話 03-5489-3211・FAX 03-5489-3210
Eメール hotnews@almecc.co.jp
ホームページ <http://www.almecc.co.jp/>